

褚遂良（596―658）隋の開皇16年に钱塘（現在の杭州市）で生まれた。名は遂良、字は登善。河南郡公に封ぜられたので褚河南とも呼ばれた。唐の太宗、高宗に仕えた高官。虞世南の弟子。品行方正にして硬骨、清廉潔白な人格と伝えられる。褚氏は河南から江南に移住した南朝に仕えた名門一族。祖父の褚玠は陳に仕えた高官で、廉直な人柄と伝えられ、退官後は自給して清貧に甘んじた。博學で文章に秀で二百篇余の著書がある。父の褚亮も博學で詩文にすぐれ、陳・隋・唐に仕えた、唐では弘文館學士であり、虞世南・欧陽詢の親しい友人であった。遂良は61年22歳のとき唐の役人になった。虞世南が秘書省の長官のころ、褚遂良は秘書省のエリート青年官僚であった。貞観10年（636）「起居郎」（皇帝の言行記録官）となる。虞世南、欧陽詢の死後、二人の後を継ぎ「侍書」になる。「侍書」は皇帝の秘書官で王羲之などの書跡を太宗とともに鑑定した。貞観17年（643）太子廢立事件の後、褚遂良が推薦した太宗の第九子の晋王・治（後の高宗）が皇太子になると、「太子賓客」となり皇太子の教育にあたり、その後中書令（勅書担当官）、尚書右僕射（宰相）にまでのぼりつめた。永徽2年（651）李勣らと永徽律令を制定した。永徽6年（655）高宗による皇后廢立事件がおこる。廢立に強く反対した褚遂良は、高宗により潭州（長沙）、桂州と左遷された。その後（658）、武皇后により愛州（ベトナム北部）に左遷され、この年この地で病没した。二人の子も愛州に流される途中で殺された。

虞世南に書画鑑定の知識から書法まで一切を学んだ後、王羲之の書を学び、虞世南の南朝風と欧陽詢の北朝風を融合し、隸法を取り入れた独自の書風を創りあげ新境地を開いた（褚法）。行書作品は王法を徹底的に研究して成り立っている。褚遂良が鑑定した王書は2290紙にのぼり、その内容は楷書50紙・行書240紙・草書2000紙で、その目録である『晋右軍王羲之書目』を編纂した。この書は、現在でも王羲之研究の基本テキストである。

典型的楷書の出現（欧陽詢・虞世南・褚遂良）

六朝隸書（隸楷書）・・・六朝時代の楷書の隸書の影響と洗練化

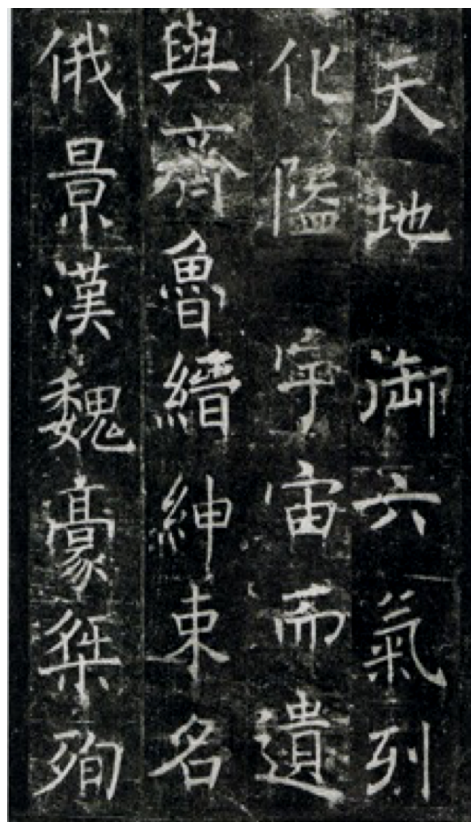
褚遂良の楷書には隸意があり、折鋒の多い用筆法である。欧陽詢の影響。

「伊闕佛龕碑」↓「孟法師碑」↓「雁塔聖教序」の流れ

伊闕佛龕碑（641） 46歳の作



孟法師碑（642） 47歳の作 唐拓「孤本」





雁塔聖教序（永徽4年・653） 58歳の作 最高傑作

房玄齡碑（652年前後） 55歳頃の作。



特徴

（伸びやかで、粘りと鋭さを持った線質。しなやかで内に厳しさを秘めた線。虞世南の温雅、欧陽詢の厳正、褚遂良の婉美）

※虞法、欧法、王法に隸法、行意を融合し、書の歴史を背負った独自の褚法を創造した。黄庭堅は「運筆は空中に花を散らす有り様」と称え、米芾は褚遂良の書をよく研究理解し、自己の制作に役立てた。その米芾を最も理解したのは董其昌である。

章法

余白の美しさ（「九成宮」は行間が通っているが、「雁塔」は字間が通っている。画と画、字間、行間の余白の美）

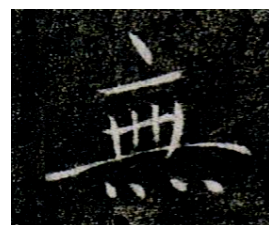
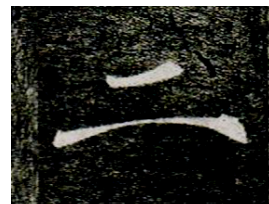
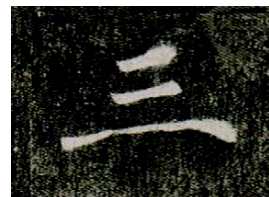
※余白と字画の比率は約 10 対 1。

用筆法

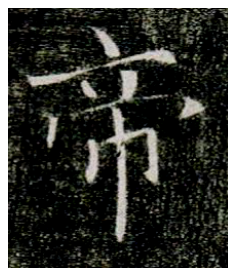
（变幻自在。俯仰法。隸法がまじっている）多彩な表現（緩急、太細、強弱の変化）

※筆は馬の毛などの剛毛筆を使用か。

横画（露法、蔵法、逆入、入筆角度様さま）前画を受けての起筆の変化



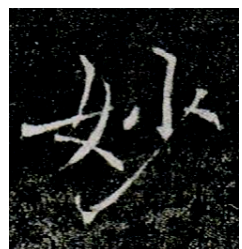
縦画（垂露、鉄柱、懸針その他）



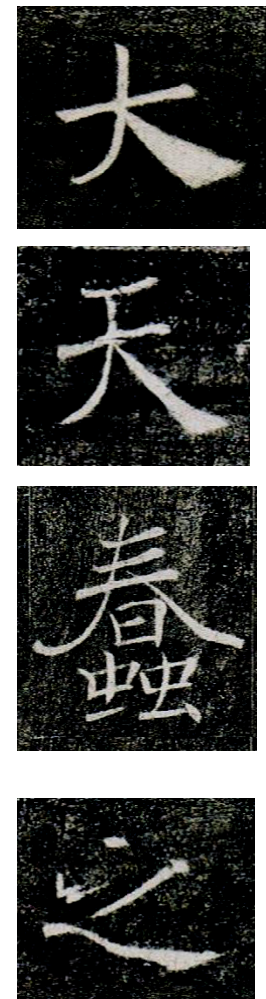
転折



左はらい



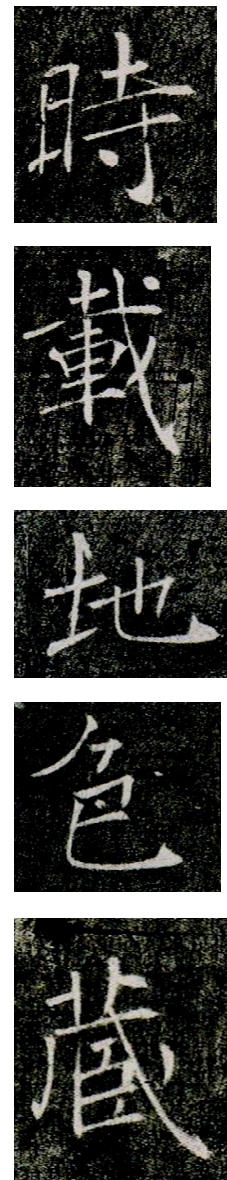
右はらい



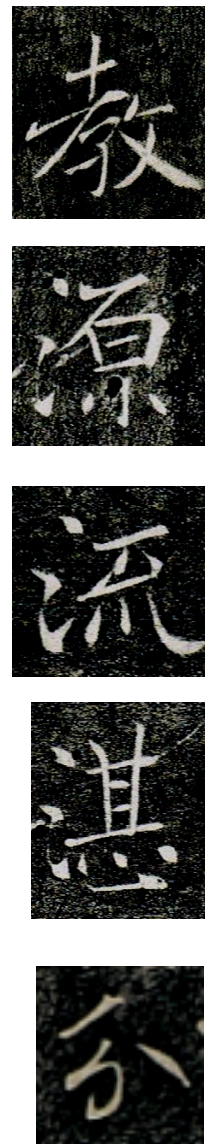
点（点の表現にその書の本質が見える）



はね



行書的な連続とリズム



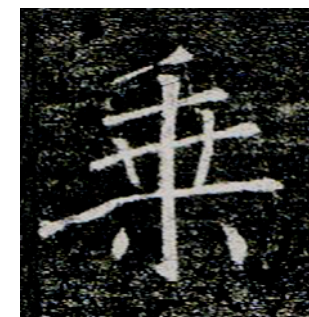
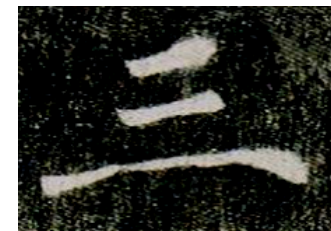
隸書の筆法



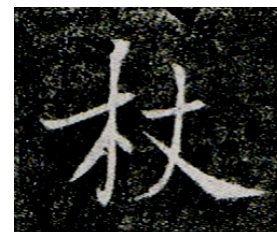
筆の割れ、飛び、欠画（「避諱」^{ひき}の習慣。失画^{しつが}、改字ともいう）



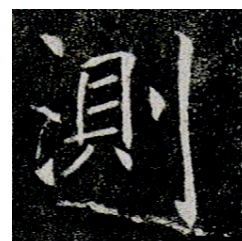
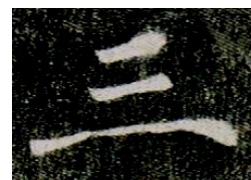
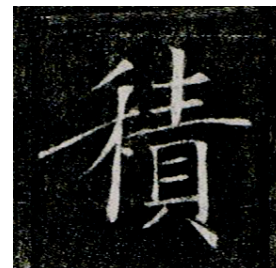
折鋒（起筆部・送筆部・終筆部に分かれている）



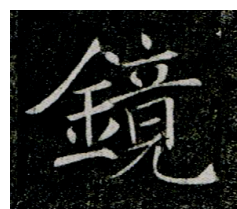
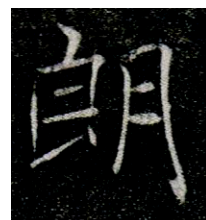
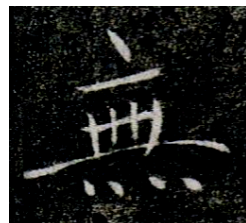
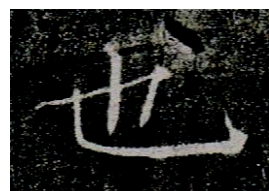
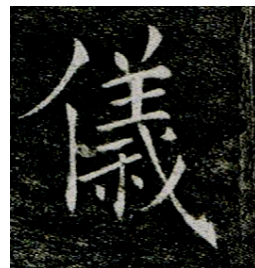
二つの部分に分けられる懸針



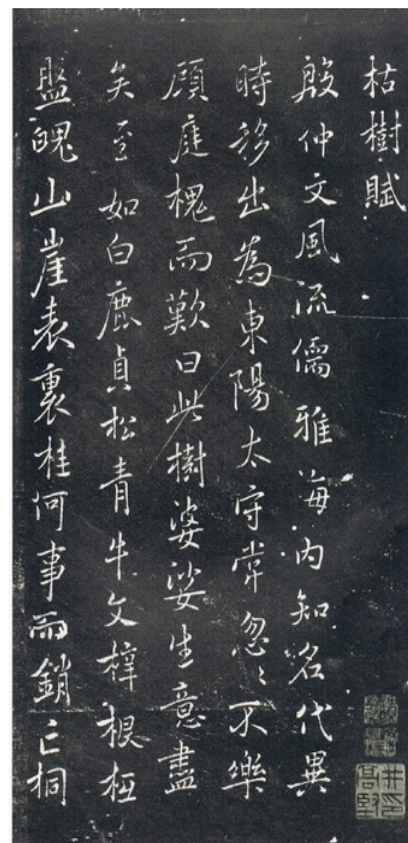
角度の変化（豊かな表情）



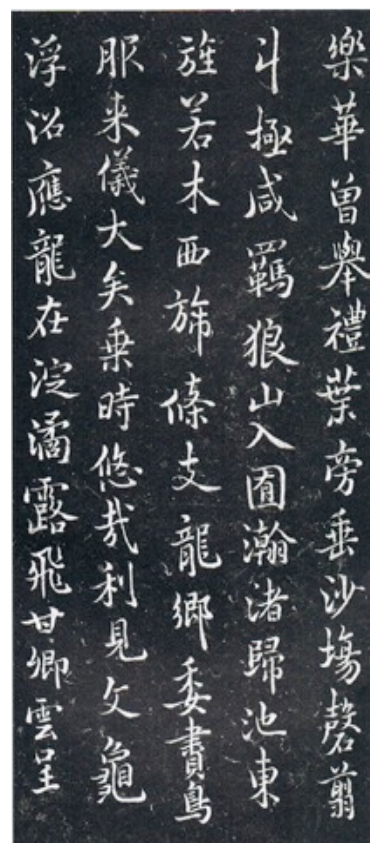
字形（外形は変形五角形。縦・横に伸びる。平行等間隔が原理だが、参差の表現）



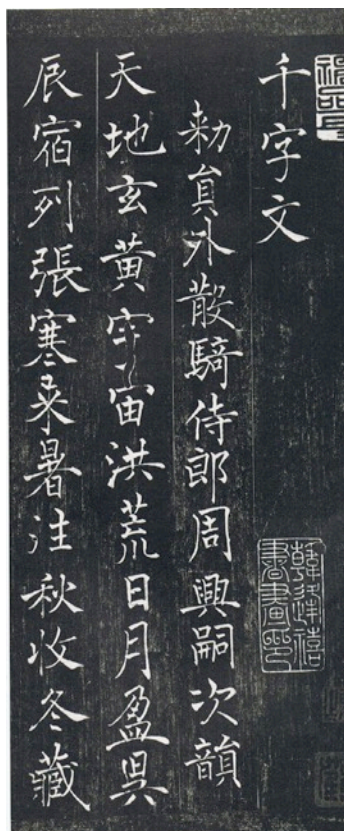
枯樹賦（伝・褚遂良 貞観4年・630 35歳の作 行書）



文皇哀冊 (伝・褚遂良 貞觀23年・649 54歳の作 行書)



楷書千字文 (伝・褚遂良 永徽4年・653 58歳の作)



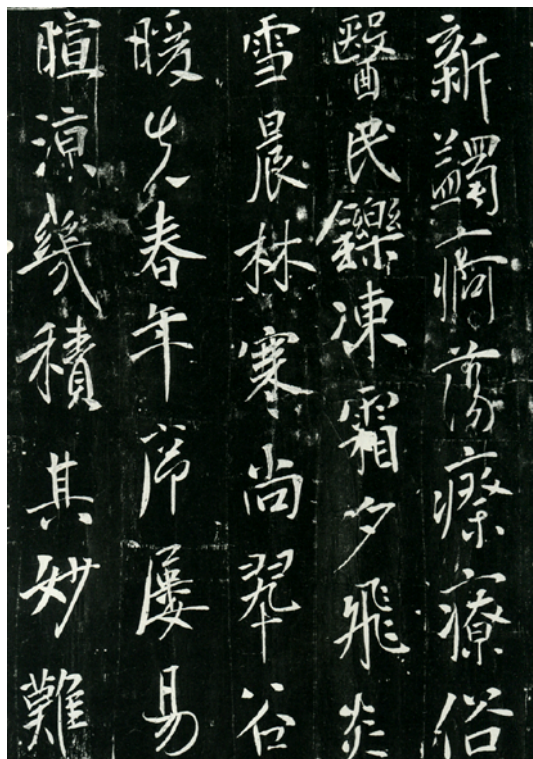
伝・褚遂良臨「蘭亭序」 (八柱第一本) 米芾以後の臨本?



太宗の書 (氣迫あふれる自由奔放な書である)



昭陵
しやうりやう

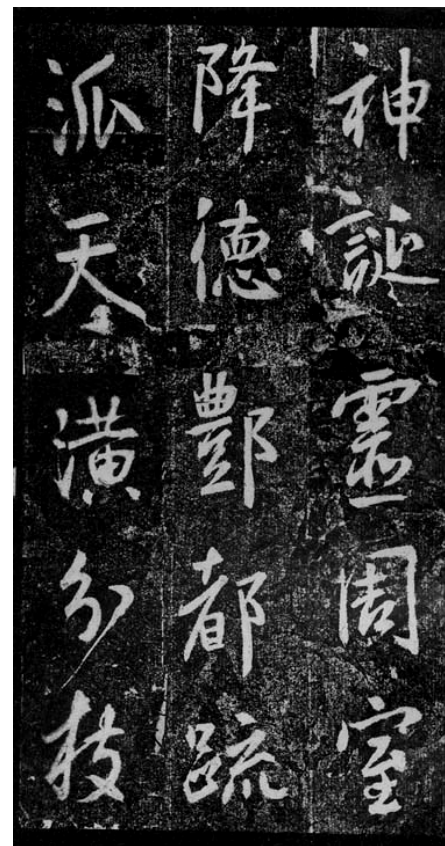


温泉銘
おんせんめい

貞観 22 年・648

行書碑

唐拓「孤本」

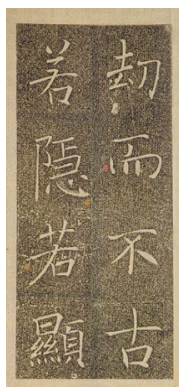
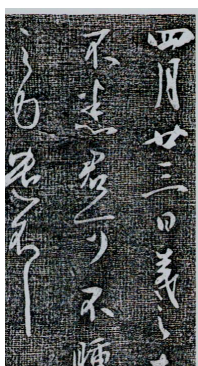
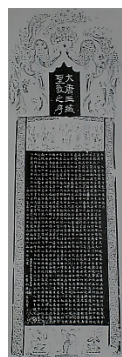


晋祠銘
しんしめい

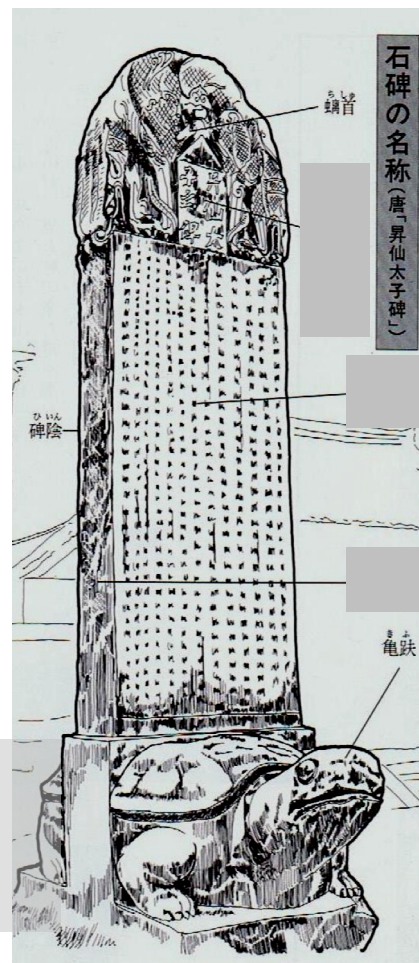
貞観 20 年・646

最古の行書碑。





拓本（石や木や金属などに刻された文字や文様に紙を直接あてて写し取ったものこと。石摺り、石刷り、ともいう）



石碑（「碑刻」「いしづみ」「碑」ともいう）
昔、石に文字を刻むことは「神聖な行為」であつたらしい。石碑の形式は唐代に完成した。
書（原稿）・碑・拓本の関係を考えてみよう。直接石面に書くことを書丹（朱丹ともいう）という。丹は赤、朱の意。

諱（本名）を避けること。親や主君など、目上の人の本名を用いることを忌避する、東アジア漢字文化圏の習慣。「実名敬避俗

同義の別字や語句に置き換える。観世音↓観自在など。

「欠画」
 文字の二画を記さない。「欠字」
 「欠筆」ともいう。※「温泉銘」が太宗の筆跡だと判断された例。「世」と「民」

文人知識人の呼び名として諱の代わりに用いられた。蘇軾（諱）↓蕪東坡（号）吉田矩方（諱）↓吉田松陰（号）

その他「官名」かんめいなどがある。

『秦の始皇帝』 白帝社
1994 稲山 明著

『マンガ孫子韓非子の思想』講談社
『史記』は全7巻別巻1

『中国の人と思想』全12巻より「1・孔子」「2・孟子」「3・孫子」「4・老子」「5・荘子」「6・司馬遷

『中国の英傑51諸葛孔明』集英社 1977年刊。

『万葉集』講談社文庫 全4巻別巻1巻 1978 中西進翻訳 X Z

『中国古代文明』 山川出版社 2006 鶴間和幸・他著

『千字文』 岩波文庫 1997 小川環樹

『隋の煬帝』 中公文庫 1987 宮崎市定著

『九品官人法の研究』中公文庫 1997 宮崎市定著

『世界帝国の形成』講談社現代新書 1977 谷川道雄著
『隋唐世界帝国の形成』講談社学術文庫 2008 谷川道雄著

『古代東アジアの民族と国家』 岩波書店 1998 李成市著
『日本古代史と朝鮮』 講談社学術文庫 1985 金達寿著

『中国の古代都市文明』 思文閣出版 2002 杉本憲司著
『中国書人云』 芸術新聞社 1985 駒田言二著

『図説・漢字の歴史』普及版 大修館書店 1989 阿辻哲次著
『中国去書選』『中国去書ガイド』各1巻、60巻 二玄社

『王義之』墨スペシャル3 芸術新聞社 1990

『図説・中国書道史』墨スペシャル9 芸術新聞社 19

『中国絵画のみかた』二玄社 1995 王耀庭著

『墨』62号「千字文」、72号「初唐の三大家」、95号「九成宮醴泉銘」、105号「雁塔聖教序」、128号「孔子廟堂碑」 芸術新聞社